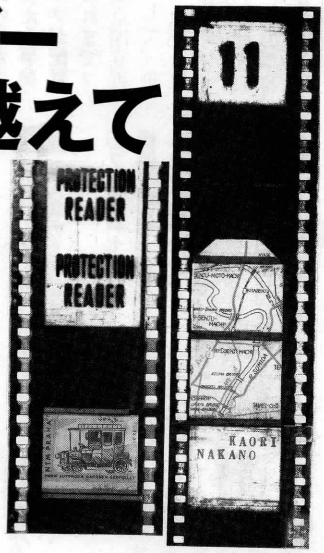
ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織



カット制作＝井上陽子

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

中野香織

㊿ 嫉妬をコヤシにファムソーシャル

アジャーニもソフィア・ローレンも、そうか、蝋人形でありましたか。でもまあ、蝋人形として見ればそれなりにキッチュな味わいがあっていいものです。

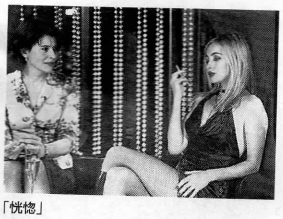
しかしやはり、女の底力を見せつけるという点では、蝋肌はライブ肌にはかないませんね。「恍惚」のファニー・アルダン、55歳の額にくっきり刻まれた横じわを見よ！　ってなもんです。

夫（ジェラール・ドパルデュー）の浮気発覚で衝撃を受けたのを機に、娼婦（エマニュエル・ベアール）に依頼して夫を誘惑させ、その情事の内容を逐一詳細に報告させる妻……っていうのがアルダンの役どころなんだけど、ベアールがあのアヒル唇で「彼の手は滑らかね。ええ柔らかで、あの奥を……」なんて赤裸々に語る間じっと、かすかに額じわを震わせながら聞き入るその表情がもう、エロティックでエレガントで。

なんといってもアメリカ女（「シルヴィア」のグウィネス）や日本の女（「死の棘」の松坂慶子）だったら狂気の原因になりかねない嫉妬というどろどろの感情を、コヤシにしてしまうところがあっぱれ。この強さはフランス女特有のものでしょうか。アニー・エルノーっていうフランスの女性作家が書いた『嫉妬』（早川書房）という作品を読んだんですが、そこにも同種のすごみを感じました。男の新しい愛人の存在を知ったその「すべてが一気に崩れ去る感覚に襲われ」た瞬間、「もうひとりの女性の存在が私の中に侵入した。それからというもの、私は彼女をとおしてしか、ものを思うことがなくなってしまった」だなんて、嫉妬をネタに、直視しがたい感情を書ききるあたり、タフでしたたか。アルダンといい、エルノーといい、オトナの女っていうのはこういう離れ業ができる人をいうのか。

あ、そういえばこの映画ではまさにアルダンがベアールをとおしてものを思うようになっていくのよね。ベアールもアルダンをとおして世界を広げていくし。結果、しだいにこの二人の女の間には緊密な絆ができていって、ドパルデューはただの触媒みたいなもんになっていく……ってこれ、「冒険者たち」とかの男2人に女1人の「ホモソーシャル」映画の逆パターンじゃ？　四方田犬彦さん他編の『男たちの絆、アジア映画』（平凡社）によれば、ホモソーシャルって〈同性同士がその絆の強化確認のために異性を利用するシステム〉ってことですが、ドパを媒介とするアルダンとベアールの関係ってそれに近いですよね。

女2人がその絆を強化するために1人の男を利用するこのシステム、ファムソーシャルって名づけていいもんでしょうか？



「恍惚」
12月中旬よりBunkamuraル・シネマにて